

# 高齢者を対象とした万引き防止のための 教育プログラムの開発と実践

岡 田 涼  
大久保 智 生  
時 岡 晴 美  
堀 江 良 英  
松 下 昌 明

1. 問題と目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

## 1. 問題と目的

近年、高齢者の犯罪について社会的な関心が寄せられている。日本における65歳以上の高齢者人口は増加しているが、その全体的な人口増加を上回るかたちで高齢者犯罪は増加している（浜井，2009；堀田・湯原，2010）。犯罪白書（法務省法務総合研究所，2011）によると、平成22年度の高齢者の一般刑法犯においてもっとも高い割合を占めているのは窃盗罪であり、その大部分が万引きであった。また、万引きを含む高齢者の窃盗は、他の犯罪と異なり、1960年代以降2000年代まで漸次的に増加している（山上，2003）。高齢者の万引きをいかに抑止していくかが問われている。

香川県においては、万引き対策が喫緊の課題となっている（大久保，2012）。人口比あたりの万引き認知件数について、香川県は2002年から2009年の7年間連続でワースト1位であり、万引きの多い県として知られている。このことを受けて、平成22年度に香川県警察と香川大学の共同事業として「子ども安全・安心万引き防止対策事業」が立ち上がり、県内の万引きの実態把握や万引きの背景要因に関する調査、万引き防止のための啓発動画の作成などが進められている。この事業では、青少年に限定するのではなく、その保護者や一般市民、高齢者など、地域全体を対象とした取り組みを行っている。

これまで万引きに関する研究は少なく、特に高齢者の万引きの特徴についてはあまり明らかにされてこなかった。野田（1993）によると、犯罪加害者として的高齢者が注目されるようになってきたのは1980年代以降であり、その原因としては、①少年非行の変化が際立っていたこと、②絶対数において高齢者の犯罪が必ずしも多くないこと、③高齢者の犯罪は悪質性の程度が低いこととされている。また、犯罪種としてみたときに、万引きは重大な犯罪ではないというイメージが強かったために、その特徴について十分な研究が進められてこなかった（Krasnovsky & Lane, 1998）。

最近では、万引きに対する社会的関心の高まりとともに、高齢者の万引きの特徴が明らかにされてきている。注目すべき特徴は次の2点である。1つ目は、高齢者の万引きに関する規範意識は概して高いこと

である。個人差はあるものの、一般の高齢者においても、万引きを行った高齢者においても、万引きが悪いことであるという規範意識は概して高いことが明らかにされている（宮前・堀江・松永・宮前・大久保，2012；大久保・堀江・松浦・松永・江村，印刷中）。そのため、万引きが悪いということを伝えるだけでは、万引きの防止にとって有効な対策にはなり得ないと考えられる。2つ目は、高齢者が万引きに至る背景として、孤独感や寂しさなどが影響していることである。大久保・堀江他（印刷中）は、青少年から高齢者までの万引き被疑者を対象に調査を行い、その背景要因について検討している。そのなかで、65歳以上の高齢の万引き被疑者においては、3割以上が独居であり、普段から相談できる他者がいないと回答した者の割合が高かった。万引きの動機についても、青少年に比べて高齢者は「寂しかったから」の得点が高くなっていた。また、野坂・大槻・柏木・市川・橋迫（1988）は、高齢受刑者においては、一般高齢者よりも孤独感を感じる程度が強いことを報告している。これらのことから、高齢者が万引きを行う背景には孤独感や寂しさの問題があることが窺われ、その対応が万引きの抑止にとって重要となると考えられる。

高齢者の万引きの背景に孤独感や寂しさがあるとすれば、地域全体として対策を考えていくことが不可欠である。内閣府（2010）が行った調査では、近所づきあいがより親密で、親しい友人や仲間がいる高齢者ほど、生きがいを感じていることが明らかにされている。地域における他者とのかかわりは、高齢者の孤独感や寂しさを低減させる機能をもっていると考えられる。また、犯罪についても地域の役割は重要となる。高木・辻・池田（2010）は、地域レベルで日頃から挨拶する知人の数が多い街区ほど住民間の協力的行動が多く、結果的に犯罪件数が少なくなることを明らかにしている。これらのことから、高齢者の万引き対策においては、その背景にある孤独感や寂しさを低減させ、万引きを抑止し得る地域の役割に注目することが有効であると考えられる。

本論文では、地域で取り組む高齢者の万引き防止のための教育プログラムを作成した実践例を報告する。教育プログラムでは、万引きをする可能性があるものとして参加者を捉えるのではなく、むしろ万引きのない地域と一緒に作っていく担い手として参加者を捉える。浜井（2009）は、高齢の元受刑者の社会復帰に関して、元受刑者を受け入れる地域社会の寛容さが重要であるとしている。高齢者の万引きの予防と再犯の防止にとっては、万引きを行い得る高齢者ではなく、その周囲にいる住民に働きかけていくことが有効であると考えられる。教育プログラムの要素としては、①万引きに関する知識を獲得すること、②万引き防止における地域の役割を考えること、という2つの要素を柱とする。これら2つのことを通して、万引きの現状を知り、自分たちの地域の問題として考える視点をもってもらうことをねらいとする。

## 2. 方法

### (1) 対象者

教育プログラムは3か所で実施した。1か所目の参加者は、高松市内にある高齢者専用介護付き賃貸住宅の利用者とデイサービスの利用者22名（男性9名、女性13名）であった。平均年齢は83.95歳（ $SD=6.74$ ）であり、年齢の範囲は72歳から97歳であった。各利用者に対して事前に案内チラシを配布し、自主的に参加した方を対象とした。2か所目の参加者は、東かがわ市に住む高齢者29名（男性11名、女性18名）であった。平均年齢は79.97歳（ $SD=6.74$ ）であり、年齢の範囲は69歳から90歳であった。東かがわ市では、社会福祉協議会が主体となって地域サロン事業を進めており、地区内の高齢者が定期的に交流する場が設けられている。このサロン事業での集まりの際に、今回の教育プログラムを実施させてもらった。3か所目の参加者は、高松市内にある特別養護老人ホームで開催されている介護者教室に参加した高齢者29名（男性6名、女性21名、不明2名）であった。平均年齢は79.70歳（ $SD=7.12$ ）であり、年齢の範囲は65歳

から94歳であった。当施設では、様々なテーマで定期的に介護者教室が開催されており、その介護者教室の一環として実施させてもらった。

(2) 実施時期

1か所目と2か所目は2012年11月に実施し、3か所目は2012年12月に実施した。

(3) 教育プログラムの流れ

教育プログラムはワークシートに基づいて行った。ワークシートの前半には香川県の万引きに関するクイズとその解説、後半には万引き防止の啓発動画の登場人物の写真と自分の意見等を書き込む欄が含まれていた。プログラムの概略をTable 1に示す。実施の際には、対象者に合わせて細部を変更した。プログラムは第一著者が実施し、全体の所要時間は約40分間であった。

Table 1 教育プログラムの大まかな流れ

項目	内容
①万引きに関する知識の確認 (5分)	○×クイズをもとに、万引きに関する自分の知識を確認する。参加者が各自でクイズに解答した。
②万引きの現状の説明 (5分)	○×クイズの解答と解説を提示することで、万引きに関する知識(香川県の万引きの現状、万引きの背景要因など)を伝えた。
③万引き防止啓発動画の視聴 (10分)	万引きに関する啓発動画を視聴し、高齢者が万引きを行う背景について考えた。
④万引き対策について考える (10分)	ワークシートをもとに、万引きをしなくてすむ社会を作っていくためにできることを考えた。ワークシートにある取り組みの例の選択肢から選び、その他の取り組みを考えた。それをもとに近くに座っているものどうして話合った。
⑤まとめ (5分)	高齢者の万引き防止においては、その背景にある孤独感や寂しさに注目する必要があること、そのためには地域の役割が重要であることを確認した。
⑥アンケート記入 (5分)	プログラムの効果としてアンケートに回答した。

①万引きに関する知識の確認 香川県における万引きの実態について、先行研究(香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業, 2011)での調査データをもとに作成した○×クイズ(5問)に各自で解答してもらった。クイズの問題例は、「香川県は人口当たりの万引きの認知件数が全国でも少ない県である」「万引きをするのは、中学生や高校生など若者だけである」などである。

②万引きの現状の説明 参加者がクイズに解答した後、正解を確認し、解説を行った。その際、香川県は万引きが多い県であること、高齢者の万引きは孤独感や寂しさから行われる傾向があること、などを確認した。なお、1か所目での実施の際は、クイズの解説はワークシートをもとに口頭のみで行ったが、細かい字が読みづらく、またページを何度もめくることに困難を感じている様子が見られた。そこで、2か所目と3か所目では、クイズの問題と解答、解説をプレゼンテーションファイルとして作成し、会場前部のスライドに投影した。

③万引き防止啓発動画の視聴 高齢者を主人公とする万引き防止のための啓発動画「万引きにレッドカード：社会で取り組む万引き防止」(大久保・時岡・有馬・松浦・高橋, 2012; 時岡・大久保・有馬, 2012)を視聴してもらった。

④万引き対策について考える 啓発動画の内容を踏まえて、自分たちの地域における万引き対策について考えてもらった。まず、動画のストーリーとして、高齢者の万引きの背景には孤独感や寂しさがあることを確認した。そのうえで、ワークシートをもとに、万引きをしなくてもいいような社会を作るために何が

できるかを問いかけた。考えを進めていく手順として、最初にワークシートに印刷された地域での取り組みの例からもっとも効果的だと思うものを1つ選んでもらった。選択肢は、「日頃から、近所で声をかけあったり、家を訪問しあう」「自治体の職員が定期的に訪問するようにする」「ご近所で参加できるようなイベントや集まりを企画する」「気軽に集まれる場所（公民館、集会所など）を増やす」の4つであった。続いて、他にどんな取り組みがあり得るかを自由に記述したうえで、近くに座っている参加者同士で5分ほど話し合ってもらった。ただし、1か所目での実施の際は、参加者の状態からお互いに話し合うことが困難であると感じられたため、選択肢について挙手をしてもらい、意見の共有を図るにとどめた。

⑤まとめ 教育プログラムのまとめとして、高齢者の万引き防止においては、その背景にある孤独感や寂しさに注目する必要があること、そのためには地域の役割が重要であることを確認した。

⑥アンケートの記入 教育プログラムに対するアンケートを記入してもらった。必要に応じて実施者が質問項目を読み上げたり、個別に説明を行うなどして、回答の補助を行なった。なお、1か所目では、すべての項目に回答することが困難であったため、後述するプログラム全体の印象に関する4項目のみ回答してもらった。その他の2か所においても、参加者が無理のない範囲での回答をお願いした。

#### (4) 万引き防止のための啓発動画のあらすじ

動画では、1人の高齢者（岸田スミ子）が万引きに至ってしまうストーリーが描かれている。72歳の岸田スミ子は、夫に先立たれてから1人で家に閉じこもって暮らしている。それを心配した近所の主婦は声をかけるが、岸田スミ子は相手にせずに突き放す。岸田スミ子は、ホームセンターに入り、雑貨や食料品などを次々にバッグに入れ、そのまま店を出ていこうとする。店を出ようとしたところで保安員に呼び止められ、事務所に連れて行かれる。そこに警察官が到着し、万引きで捕まるのが初めてではないことが伝えられる。その後、警察署に移動する。警察官からの「相談できる人はいないのか」という問いかけに対して、岸田スミ子は「誰っっちゃおらん」とつぶやき、いつも一人だったことを涙ながらに語る。警察署を出る際に、警察官から周りを見ている人がいるから万引きをしてはいけないと諭される。家に帰りついた岸田スミ子に、近所の主婦が話しかけ、公民館で行っているカラオケクラブに誘う。「一緒に歌いましょうよ」という誘いかけに対して、岸田スミ子は涙する。公民館でのカラオケのシーンになり、マイクを手に歌う岸田スミ子に対して人々が拍手を贈る。岸田スミ子が明るい笑顔を見せたところで動画は終了する。全体の時間は約10分である。

#### (5) 効果測定のためのアンケート

①プログラム全体の印象 プログラム全体の印象を尋ねるために、大久保・時岡他（2012）と同様に「よかった」「感動した」「勉強になった」「ひきこまれた」の4項目を用いた。プログラムの全体的な印象について、各項目に「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

②万引きに関する実感 プログラムを通して万引きの特徴や実態について、どれくらい実感が得られたかを調べるために、大久保・時岡他（2012）と同様の7項目を用いた（「万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した」「警察に通報することの重要性を実感した」など）。各項目に対して、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

③万引きに対する態度 プログラムを受けたことで、参加者が万引きに関する問題に対してどのように関わっていこうとしているかを調べるために、岡田・大久保・時岡・七條・松浦・大前・三好（2013）で用いた万引きに対する態度を尋ねる項目を用いた。これらの項目は、「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」「万引きをしない効力感」「万引きに関する情報探索」「地域づくりへの意欲」の4下位尺度各3項目の計12項目からなる。各項目に対して、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」

の5件法での回答を求めた。

### 3. 結果

#### (1) プログラム全体の印象

プログラム全体の印象を尋ねる4項目について、記述統計量を算出した(Table 2)。その結果、「よかった」「感動した」「勉強になった」は、平均値がほぼ4.5点以上であり、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした参加者の割合は85%以上であった。「ひきこまれた」については、平均値が4.34点であり、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした参加者の割合は8割であった。

Table 2 プログラム全体の印象の記述統計量

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	非常にあてはまる	Mean	SD
①よかった	1 (1.28)	1 (1.28)	1 (1.28)	23 (29.49)	52 (66.67)	4.59	0.71
②感動した	0 (0.00)	0 (0.00)	8 (11.11)	21 (29.17)	43 (59.72)	4.49	0.69
③勉強になった	1 (1.30)	0 (0.00)	5 (6.49)	20 (25.97)	51 (66.23)	4.56	0.73
④ひきこまれた	1 (1.43)	2 (2.86)	11 (15.71)	14 (20.00)	42 (60.00)	4.34	0.95

注. 数値は各選択肢の人数を示す(括弧内はパーセンテージ)。

#### (2) 万引きに関する実感

万引きに関する実感を尋ねる7項目について、記述統計量を算出した(Table 3)。その結果、すべての項目で平均値が4点を超えており、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした参加者の割合はほぼ8割以上であった。特に、「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」「万引きする側にも背景があることを実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを

Table 3 万引きに関する実感の記述統計量

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	非常にあてはまる	Mean	SD
①万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した	1 (1.89)	1 (1.89)	4 (7.55)	16 (30.19)	31 (58.49)	4.42	0.87
②警察に通報することの重要性を実感した	1 (1.92)	0 (0.00)	10 (19.23)	13 (25.00)	28 (53.85)	4.29	0.92
③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した	0 (0.00)	0 (0.00)	4 (7.69)	13 (25.00)	35 (67.31)	4.60	0.63
④万引きする側にも背景があることを実感した	1 (1.79)	0 (0.00)	4 (7.14)	24 (42.86)	27 (48.21)	4.36	0.77
⑤悪いということを知っていても万引きをしてしまうことを実感した	1 (1.96)	2 (3.92)	6 (11.76)	17 (33.33)	25 (49.02)	4.24	0.95
⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した	1 (1.85)	1 (1.85)	1 (1.85)	14 (25.93)	37 (68.52)	4.57	0.79
⑦万引きをするとどういった措置が取られるのかを実感した	1 (1.89)	0 (0.00)	2 (3.77)	14 (26.42)	36 (67.92)	4.58	0.75

注. 数値は各選択肢の人数を示す(括弧内はパーセンテージ)。

実感した」「万引きをするとどういう措置が取られるのかを実感した」では、肯定的な回答をした参加者が9割以上であった。

### (3) 万引きに対する態度

万引きに対する態度を尋ねる12項目について、項目ごとの平均値とSDをTable 4に示す。下位尺度ごとの $\alpha$ 係数を算出したところ、「万引きをした(しそうな)人へのかかわり」が.84、「万引きをしない効力感」が.68、「万引きに関する情報探索」が.74、「地域づくりへの意欲」が.76であり、一定の信頼性を有することが示されたため、それぞれ3項目の合計得点を算出した (Table 5)。

各下位尺度の理論的な中央値は9点である(各項目に「3:どちらともいえない」と回答した場合)。

Table 4 万引きに対する態度の記述統計量

	Mean	SD
万引きをした(しそうな)人へのかかわり		
①万引きをしてしまいそうな人がいたら、その人の気もちや背景をわかってあげたいと思う	4.02	1.01
②万引きをしてしまいそうな人がいたら、そうしなくてもいいようにかかわってあげたいと思う	3.96	1.15
③万引きをしてしまった人がいたら、できる限りその人のことを理解してあげたいと思う	3.74	1.27
万引きをしない効力感		
④これから先、自分は万引きをしないと思う	4.52	0.98
⑤万引きをしそうになっても、その気もちを抑えることができると思う	4.63	0.80
⑥人から万引きに誘われても、きちんと断ることができると思う	4.78	0.67
万引きに関する情報探索		
⑦万引きに関するニュースや話題に目を向けていきたいと思う	4.27	0.90
⑧万引きの背景や現状のことを常に知っておきたいと思う	4.51	0.70
⑨機会があれば、万引きのことを他の人と話し合ってみたいと思う	4.11	0.87
地域づくりへの意欲		
⑩万引きが起りにくい社会や地域を作っていきたいと思う	4.72	0.45
⑪まわりの人が万引きをしなくてもいいような社会になればよいと思う	4.85	0.36
⑫万引きをしても立ち直ることができる社会や地域であってほしいと思う	4.87	0.33

Table 5 万引きに対する態度の記述統計量

	Mean	SD
万引きをした(しそうな)人へのかかわり	11.64	3.01
万引きをしない効力感	14.00	1.82
万引きに関する情報探索	12.86	2.02
地域づくりへの意欲	14.42	0.97

この9点と4下位尺度の平均得点との差を $t$ 検定によって調べたところ、すべての下位尺度で有意な差がみられた( $t=5.82\sim 37.69, p<.001$ )。

### (4) 万引きに対する態度とプログラム全体の印象、万引きに関する実感との関連

万引きに対する態度の4下位尺度とプログラム全体の印象との相関係数を算出した (Table 6)。万引きに関する情報探索と地域づくりへの意欲は、印象の4項目と強い正の相関を示した。一方で、万引きをし

Table 6 万引きに対する態度とプログラム全体の印象、万引きに関する実感との相関係数

	万引きをした (しそうな)人 へのかかわり	万引きをしな い効力感	万引きに関す る情報探索	地域づくりへ の意欲
①よかった	.20	.16	.58***	.31*
②感動した	.24	.14	.65***	.35*
③勉強になった	.19	.08	.58***	.43**
④ひきこまれた	.18	.17	.46**	.40**
①万引きには世代ごとに特徴的な背景が あることを実感した	.31*	.38*	.24	.16
②警察に通報することの重要性を実感し た	.31*	.21	.61***	.40**
③万引き対策は地域社会全体で取り組む ことを実感した	.15	.03	.40**	.09
④万引きする側にも背景があることを実 感した	.15	-.05	.45**	.43**
⑤悪いということをわかっていても万引 きをしてしまうことを実感した	.28	.23	.43**	.42**
⑥万引きをした際にまわりの人の対応が 重要であることを実感した	.64***	-.05	.30*	.05
⑦万引きをするとどうい措置が取られ るのかを実感した	.41**	.11	.53***	.18

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

た(しそうな)人へのかかわりと万引きをしない効力感は、印象の4項目と有意な相関を示さなかった。

万引きに対する態度の4下位尺度と万引きに関する実感との相関係数を算出した(Table 6)。万引きをした(しそうな)人へのかかわりは、「万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した」「警察に通報することの重要性を実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した」「万引きをするとどうい措置が取られるのかを実感した」と有意な相関を示した。万引きをしない効力感、は、「万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した」と有意な相関を示した。万引きに関する情報探索は、「万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した」以外の6項目と有意な正の相関を示した。地域づくりへの意欲は、「警察に通報することの重要性を実感した」「万引きする側にも背景があることを実感した」「悪いということをわかっていても万引きをしてしまうことを実感した」と有意な相関を示した。

#### (5) プログラム中の参加者の様子

いずれの実施場所においても、参加者はプログラムの内容に対して概ね高い関心をもって参加していた。クイズに関して、香川県での人口当たりの万引き認知件数の多さや検挙人員に占める高齢者の多さには、驚いている参加者が多かった。啓発動画を提示した際には、大部分の参加者がかなり集中して視聴していた。シーンによっては笑い声があがったり、終了時には「もっとみたい」などの声も聞かれた。動画の内容を振り返った際に、プログラム実施者の主人公が立ち直れてよかったという声に対しては、大きくうなずいている様子がみられ、ストーリーに共感して視聴していたと思われる。

一方で、参加者が高齢であることもあり、参加している際の状態にはかなり個人差がある面もあった。特に1か所目の参加者の中には、聴力が弱っている方や自力での歩行が困難で車いすを利用している方も

いた。ワークシートの対応箇所をみつけるのに手間取ったり、クイズの解答を記入するのに時間がかかったりして、全体の流れについていくのがやや困難な参加者もいた。一方、啓発動画の際には、ほぼすべての参加者が集中して視聴できているようであった。

#### 4. 考察

本論文では、高齢者を対象に万引き防止のための教育プログラムを作成し、実践した事例を報告した。教育プログラムの構成については、①万引きに関する知識を獲得すること、②万引き防止における地域の役割を考えること、の2つを大きな柱として設定した。以下に、参加者に対するアンケートの回答をもとに教育プログラムの効果を検討していく。

プログラム全体の印象について、参加者からは概ね肯定的な評価が得られた。「よかった」「感動した」「勉強になった」の3項目については、肯定的な回答をした参加者が85%を超えており、プログラムが受講する側にとっても肯定的なものとして捉えられ、かつ学習効果もあったと考えられる。「勉強になった」に対する肯定的な回答は、クイズによって意外な事実を知識として獲得したことにあると考えられる。プログラム中に、香川県での人口比当たりの万引き認知件数の多さや高齢者の万引き検挙人員数の多さには、明らかに驚いている様子がみられた。意外性を感じた経験によって、「勉強になった」という感想につながったものと思われる。また、「感動した」の肯定的な回答の多さは、啓発動画の内容を反映していると考えられる。動画では、孤独な状態にある高齢者が万引きをしてしまうものの周囲の他者のかかわりによって立ち直る様子が描かれており、情緒的に訴える内容となっている。参加者は、自分と同年代の主人公に対して共感を覚えたものの少なくないと思われる。実際、参加者の中には動画視聴後に涙ぐんでいる方もいた。このことを考えると、動画をもとにしてプログラムを構成した点は効果的であったと思われる。

万引きに関する実感についても全般的に肯定的な回答が得られた。「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」「万引きする側にも背景があることを実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した」「万引きをするとどういふ措置が取られるのかを実感した」については、9割以上の参加者が肯定的に評価していた。今回の教育プログラムでは、万引きを個人の問題に押し込めてしまうのではなく、地域の問題として捉えて対策を考えていくことを重視している（時岡他、2012）。そのため、地域社会全体で取り組むことの必要性を実感してもらえたことは非常に重要な点である。また、万引きをする者にも背景があることや万引き対策において周囲の人の対応が重要である点は、啓発動画を視聴したことによる効果が大きいと考えられる。地域全体で万引き対策を考えていくうえで、これらは非常に重要な点であり、今回のプログラムの効果として注目すべきものである。

万引きに対する態度として、「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」「万引きをしない効力感」「万引きに関する情報探索」「地域づくりへの意欲」という4つの側面での効果を想定した。4側面とも平均得点は高く、肯定的な回答が得られたが、特に「地域づくりへの意欲」の得点が高くなっていた。これは、「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」の平均得点が高かったことと一貫する結果である。今回の参加者は、万引き対策における地域の重要性を感じ、自分も地域づくりの面から万引き対策にかかわっていかうという意欲を高めたものと考えられる。「万引きをしない効力感」「万引きに関する情報探索」の得点も高かったため、プログラムを受けて自分が万引きをしないという自信や万引きのことを自分たちの地域の問題として把握しておきたいという気持ちを喚起したものと考えられる。一方で、「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」の得点は比較的低かった。今回の参加者にとって、万引きは悪い

ことであるという意識が強く、そのために万引きをした人の気持ちを実際に理解しようとするにはやや難しさを感じる面があるのかもしれない。

今回の教育プログラムでは、万引きの現状を知り、自分たちの地域の問題として考える視点をもってもらうことを主要なねらいとしていた。大部分の参加者は、プログラムが勉強になったという印象をもち、万引きに関する様々な事実に実感していたことから、香川県における万引きの現状について一定の知識をもったものと考えられる。また、万引きを地域の問題として捉える視点をもち、地域の一員として取り組んでいこうとする意欲をもったことも示された。今回の教育プログラムは、高齢者が万引きに対する視点をもち、地域全体で万引き防止を考えていくうえで有効な対策となり得るものといえる。

今後の課題は、より多様な地域で今回の教育プログラムを実施し、普及させていくことである。今回は3か所で実践した事例を報告した。一般的に地域の状況やそこに存在する問題は多様である。香川県においても、社会的孤立やそれに対する効果的な対応策も地域によって異なることが考えられ、それゆえに万引き対策にとって具体的にどのような取り組みが必要となるかも地域独自のものがあるだろう。多様な地域で今回のプログラムを実施し、地域独自の特徴や現状を踏まえたうえで万引き対策を進めていく必要がある。

## 引用文献

- 浜井浩一 (2009). 高齢者犯罪の増加 老年社会学, 31, 397-312.
- 堀田利恵・湯原悦子 (2010). 高齢になって初めて犯罪に手を染めた女性犯罪者に関する研究 (総説) 日本福祉大学社会福祉論集, 123, 69-83.
- 法務省法務総合研究所 (2011). 犯罪白書一少年・若年犯罪者の実態と再犯防止—平成23年版 日経印刷
- 香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業 (2011). 万引き防止対策に関する調査報告書 香川大学・香川県警察
- Krasnovsky, T., & Lane, R. C. (1998). Shoplifting: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 3, 219-235.
- 宮前淳子・堀江良英・松永祐二・宮前義和・大久保智生 (2012). 一般高齢者における万引きに関する心理的要因の検討—家族および友人関係, 攻撃性, 認知症傾向が万引きへの意識に及ぼす影響— 地域環境保健福祉研究, 15, 1-8.
- 内閣府 (2010). 平成22年版高齢者白書 佐伯印刷
- 野田陽子 (1993). 犯罪行為者として的高齢者に関する研究の動向と課題 犯罪社会学研究, 18, 45-59.
- 野坂陽一・大槻隆司・柏木史雄・市川 守・橋迫重夫 (1988). 高齢受刑者の実態に関する研究 法務総合研究所研究部紀要刑事政策研究, 31, 49-84.
- 岡田 涼・大久保智生・時岡晴美・七條正典・松浦隆夫・大前和弘・三好一生 (2013). 中学生を対象とした万引き防止のための教育プログラムの開発と実践 香川大学教育実践総合研究, 26
- 大久保智生 (2012). 青少年の万引きに対する規範意識: 香川県子ども安全・安心万引き防止事業の取り組みから 青少年問題, 646, 44-47.
- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀 (印刷中). 万引きに関する心理的要因の検討: 万引き被疑者を対象とした意識調査から 科学警察研究所報告, 62
- 大久保智生・時岡晴美・有馬道久・松浦隆夫・高橋 護 (2012). 万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について (その2) —動画の視聴者の評価と参画した大学生の中学生の意識調査から— 香川大学教育実践総合研究, 25, 57-68.
- 高木大資・辻 竜平・池田謙一 (2010). 地域コミュニティによる犯罪抑制: 地域内の社会関係資本および協力的行動に焦点を当てて 社会心理学研究, 26, 36-45.

時岡晴美・大久保智生・有馬道久 (2012). 万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について (その1) —青少年編「万引きはゲームじゃない」のDVD制作による啓発効果を中心に— 香川大学教育実践総合研究, 24, 153-160.

山上 皓 (2003). 高齢者の犯罪の特徴と問題点 老年精神医学雑誌, 14, 407-412.